

高梁市の市街地に住む高齢女性の暮らし (その1)

野邊 政雄

筆者は2000年10月から11月にかけて高梁市の市街地に住む高齢女性に聞き取り調査をおこなった。本稿では、収集した事例のうちから6つの事例を提示し、これを検討することによって、地方小都市の市街地に住む高齢女性がどのような暮らしをしているかを明らかにした。

Keywords : 高梁市, 市街地, 高齢女性, 高齢化

1 本稿の目的

高梁^{たかはし}町と周辺の8村が1954年に合併して、岡山県高梁市が成立した。翌年の1955年に、高梁市は1村(中井村)を合併し、1970年には賀陽^{かよう}町の一部を編入し、現在に至っている。こうした高梁市成立の歴史的経緯から、高梁市は備中高梁^{びつちゅうたかはし}駅を中心とする市街地とその周辺に広がる農村部から構成されている。農村部の多くは、高原にある。

筆者は調査員を雇用し、高梁市に住む65歳以上80歳未満の高齢女性を対象にパーソナル・ネットワーク⁽¹⁾とソーシャル・サポート(以下では、「サポート」と略す)に関する調査票による面接調査を1997年11月から1998年1月にかけて実施した。そして、523人の高齢女性から回答を得ることができた(野邊 1999)。筆者はその中で典型的と考えられる高原部で暮らす高齢女性を1999年4月、5月、10月に自ら訪問し、どのような生活をおくっているかの事例調査をおこなった。そして、本誌第113号(野邊 2000a)で、夫婦のみで暮らす高齢女性の事例と子供夫婦と同居する高齢女性の事例を提示し、その検討をおこなった。さらに、本誌第115号(野邊 2000b)で、一人暮らしの高齢女性の事例を提示し、その検討をおこなった。この研究の継続として、2000年の10月から11月にかけて高梁市の市街地に住む高齢女性を訪問し、どのような生活をおくっているかの事例調査をおこなった。本稿では、その中から6人の事例を提示し、その検討をおこなう。この作業を通して、市街地に住む高齢女性がどのような

生活をおくっているかを明らかにしたい。

2 事例の選択

前田(1988)と野口(1991)によれば、同居家族員が高齢者のサポート源として最も重要であり、別居する子供がそれに次いで重要であるという。このことから、高齢女性が他の人々からサポートを入手しやすいかどうかは世帯類型によって大きく相違していることが予想できる。本稿では、高齢女性の世帯を、①一人暮らし、②夫婦のみ、③子供夫婦との同居の3つに分けた。そして、それぞれの世帯類型に該当する高齢女性を選び出し、聞き取り調査をおこなった。[事例1]と[事例2]は一人暮らしの高齢女性であり、[事例3]と[事例4]は夫婦のみの高齢女性であり、[事例5]と[事例6]は子供夫婦と同居する高齢女性である。

高齢女性の暮らしぶりは社会階層によっても相違していると考えられるから、社会階層で異なった高齢女性を選ぶようにした。[事例1]、[事例2]、[事例4]の高齢女性は中年になるまで困窮した生活をおくった。(ただし、第2次世界大戦中からその直後にかけては、多くの日本人は経済的に苦しい生活を強いられていたから、[事例1]、[事例2]、[事例4]の高齢女性が当時の日本社会の中でとくに困窮していたというわけではない。)現在でも、[事例2]の高齢女性は貧しい。

3 調査方法

前述のように、調査票による面接調査を1997年から1998年にかけて実施した。その調査対象者に事例調査をおこなったので、事例調査をおこなった高齢女性の基本属性（年齢、夫の死亡年、学歴、職業、世帯収入など）、パーソナル・ネットワーク、サポートの入手可能性といったことは既に分かっていた。しかし、調査票による画一的・機械的な調査では個々の高齢女性がどのように社会関係を利用しながらサポートを入手し、日々の生活をおくっているかを理解しにくいから、事例調査で具体的にどのような暮らしをしているかを明らかにしようとした。さらに、事例調査の結果は、調査票によるデータを統計的に分析した結果を解釈するのにも役立つように思われる。

事例調査では自由面接法⁽²⁾によって次の6点を尋ねた。①高齢女性の住む町内の世帯数、住民の年齢構成、町内内での助け合い。②これまでどのような人生を歩んだか。③どのような日常生活を現在おこなっているか。④（一人暮らしの高齢女性に対して）子供（夫婦）と同居しないで、一人暮らしをする理由。⑤高齢女性が組織しているパーソナル・ネットワーク、および社会関係をどのように利用してサポートを入手しているか。パーソナル・ネットワークとサポートの入手可能性は別稿（野邊 1999）で説明した方法で、調査票を用いて既に調査してあった。事例調査では、そのデータにもとづいて、高齢女性が社会関係を取り結ぶ相手と具体的にどのようなつき合いをしているか、また、そうした相手からどのようなサポートを入手しているかを尋ねた。⑥高齢女性は生活満足度を調査票による調査で答えたが、そのように答えた理由。1997年から1998年におこなった標本調査では生活満足度が100点満点で何点かを質問したが、事例調査では高齢女性になぜその得点と答えたかを尋ねた。ちなみに、生活満足度の平均は75.09で、標準偏差は16.18であった。⑦将来どのように暮らそうと考えているか。

1997年から1998年におこなった標本調査では、高齢女性の主観的幸福感として「生活満足度」の他に「モラール」を尋ねた。モラールの測定には、ロートン（Lawton）の改訂PGCモラール・スケール（17項目）を用いた（古谷野他 1989）。これは、「あなたは自分の人生が年をとるにしたがってだんだん悪くなってくると感じますか。」といった17の質問に「はい」か「いいえ」で答えるものである。そして、高いモラールと関連する選択肢を選んだ場合に1を与え、そうでない場合は0を与える。この得点を17の質問について合計してゆくので、値は0

から17まで分布する。このモラール得点も示した。ちなみに、モラール得点の平均は11.29で、標準偏差は3.62であった。

4 事例の提示

[事例1]

一人暮らしの高齢女性の事例

① 居住地の状況

Hさんは69歳の女性で、旧高梁町のアパートで一人暮らしをしている。このあたりは、住宅地である。家は、備中高梁駅から歩いて20分くらいのところにある。歩いて数分のところには、商店街がある。また、数分も歩けば、いくつもの病院がある。

Hさんの町内会は30世帯からなっている。そして、上組と下組の2つに分かれている。神社の草取りを年に1回おこなう。町内会は納税組合でもある。町内会が所得税や固定資産税といった税金、国民健康保険料や国民年金保険料、水道料金を徴収し、税務署や市役所に納入している。町内会が税金、保険料、水道料金を徴収すると手数料がもらえ、それをためて日帰り旅行をしている。葬式があるとき、この町内では葬儀屋に葬式を頼むのではなく、町内会が葬式をおこなっている。町内会の人々が手分けをして、祭壇を市役所から借りたり、霊柩車やタクシーの手配といった仕事をおこなう。また、町内会は道路の清掃を年に1回したり、お宮の草取りをしている。

② これまでの暮らし

Hさんは京都市に生まれたが、まもなく岡山県の県北の町に移り、そこで少女期をすごした。母親はHさんが幼いときに早死にした。その後、岡山市に移り、そこで高校に通った。高校の先生と結婚し、夫の出身地である旧高梁町に夫の母親と3人で住み始めた。

息子が1953年に生まれた。Hさんは1960年から近所の会社に勤め始め、経理の仕事をした。夫は体が弱く、1962年に病気で死亡した。それからは、金銭的に苦勞した。夫の死後は、夫の母親と息子の3人で暮らした。Hさんが働き、夫の母親が家事をした。夫の母親はとてもいい人であったから、Hさんは本当の母親のように思っていた。息子は大学に進学するために、1971年に高梁市を離れた。それからは、息子と別れて暮らしている。息子には好きなようにさせている。夫の母親が1980年に脳溢血で倒れ、半身不随となってしまった。Hさんは働きながら夫の母親を10年間自宅で看病した。夫の母親は1990年に90歳で亡くなった。それ以来、Hさんは一人暮らしをしている。1990年に60歳で定年退職した。幸運にも、近所にある別の会社に経理の腕を見込まれて、

再就職をした。

③ 現在の暮らし

Hさんは健康で、べつだん体で悪いところはない。かくしゃくとしており、年齢よりもかなり若く見える。とても社交的である。現在でも、再就職した近所の会社で経理の仕事をしている。朝の8時半から夕方6時までの勤務である。年なので仕事をやめたいが、社長に「重宝がられて」もっと働き続けてほしいと言われる。現在は一人暮らしなので、金銭的には困ってはいない。Hさんは車の運転をせず、自転車にしか乗らない。自宅の近くに商店や病院があるので、生活でなに不自由していない。

習字を月に3回習っている。20人くらいがその教室にいる。習字の仲間と一緒に旅行に行ったり、忘年会や新年会などをする。そして、わいわいといういろいろな話をする。檀家となっている高梁市のお寺で、お茶会が月に1回開かれる。これにも必ず行っている。Hさんは自由に生きており、それを楽しんでいる。

④ パーソナル・ネットワーク

Hさんのパーソナル・ネットワークは、図1のようである。息子夫婦は横浜市に住んでいて、会社を経営している。息子は正月やお盆に孫を連れて高梁市に戻って来る。Hさんは今年の5月の連休に息子夫婦を訪ねた。週に1度は息子夫婦と電話で話をする。食材などを宅配便で送ってあげたり、送ってもらったりする。息子夫婦はHさんを気にかけて、大切にしてくれる。息子夫婦とは「いい関係」である。

妹が大阪府に住んでいる。年に1度ほど会うだけであるが、3日に1度は電話で話をする。今年、妹と一緒に京都市にある自分たちが生まれた場所に行った。食材などを妹に宅配便で送ってあげたり、送ってもらったりする。

Hさんが一人暮らしであるということで、近所の人々はHさんに気を配って、親切にしてくれる。町内会長の男性はHさんにしばしば声をかけてくれたり、野菜や餅などを持ってきてくれる。また、かかりつけの歯医者は車で郊外型の大型店（スーパーマーケット）に買い物に連れていってくれる。いい近所づきあいをしているという。

Hさんには、親しい友人がいる。その人は、娘と一緒に住んでいる50歳代の女性である。Hさんのアパートのほんの目と鼻の先に住んでいる。その友人と娘をしばしば食事に自宅に呼んだり、友人に食事に呼ばれたりする。少し顔を合わさないと、その友人や娘がHさんの家に来て話をしていたり、食事に呼んでくれる。また、その友人はいろいろな面でHさんを助けてくれる。Hさんが病気になれば看病

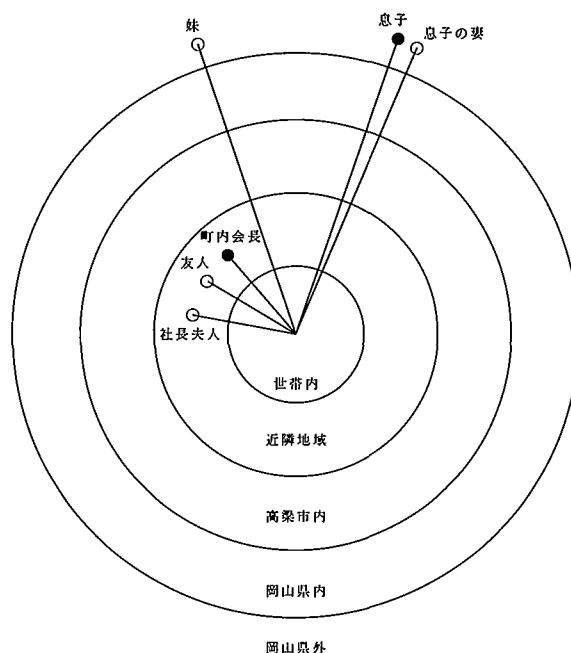


図1 Hさんのパーソナル・ネットワーク
注：黒丸は男性を示し、白丸は女性を示す。

をしてくれるであろうし、お金が足りないときは借金もできる。留守のときの家の世話、ちょっとした頼み事、悩み事の相談もその友人にする。Hさんが病気で倒れたりしたら、この友人が息子夫婦に連絡をしてくれる。このように家族同然のつき合いをその友人とはしている。

勤務する会社の社長夫人は、Hさんにとっても親切である。50歳代の人で、Hさんの家にしばしば来て、世間話をしてく。

⑤ 主観的幸福感

仕事をするのと習字を習うことが今の生きがいである。また、近所づきあいや友人関係もいい。こうしたことから、1998年の1月には生活満足度は100点であると答えた。モラルの得点は17点であった。現在でも、1998年のときと同じ理由で生活満足度は100点である。

⑥ 将来について

息子の妻はHさんに横浜市に行って同居することを勧めてくれる。しかし、近所づきあいはそこではあまりないし、今からサークルに入って友人を新たに作るのもたいへんであるから、息子夫婦と同居したいとは思わない。いろいろ助けてくれる親しい友人が旧高梁町にはいるから、Hさんはずっとここに住み続けたいと思っている。介護保険が2000年4月から始まったことに合わせて、現在勤めている会社は高齢者介護の仕事も始めた。社長は冗談でHさんの介護もしてあげるよと言ってくれる。

Hさんは仕事をやめたら、いろいろなサークルに入って、おしゃべりをしたいと考えている。

〔事例2〕

一人暮らしの高齢女性の事例

① 居住地の状況

Iさんは旧高梁町に住む72歳の女性である。1人で暮らしている。家は備中高梁駅から歩いて15分くらいのところにある。住宅地であるが、周囲に畑が多い。

町内会はこの付近にあるけれど、Iさんは加入していない。

② これまでの暮らし

Iさんは大阪府で生まれた。岡山県東部の町に移り、そこで青年時代をすごした。男性が第2次世界大戦中に出征したので、労働力が工場などで不足した。Iさんはその町にあるレンガ工場に父親や妹と勤め、耐火レンガを作った。1943年から1948年まで働いた。とてもきつい仕事だった。第2次世界大戦中やその直後は、衣料、塩、米が配給で、物がなくて苦労した。とくに、食べ物がないとたいへんだった。その後、両親は岡山県東部にある別の町に土地を買い、一家でそちらに移った

1953年に見合い結婚をした。両親が結婚を決めた。夫が高梁の人だったということから、旧高梁町に住むことになった。夫は長男であったので、夫の父親と弟2人と同居した。夫の母親は既に亡くなっていた。夫の家族は家業として漁業をしていた。夫も漁師をしており、高梁川で魚を捕っていた。夫との間に、娘3人と息子1人が生まれた。

Iさんは家事や育児だけでなく、家業の手伝いもした。Iさんは漁はしなかったが、魚を漁網からはずす作業をした。漁業のかたわら、夫たちはお客に川原で捕った鮎で鮎飯を食べさせることもしていた。そうした注文がある日には、Iさんが料理用具や食器を自宅から川原に運んで鮎飯料理の準備をした。こうした漁業の手伝いでとても忙しかった。

夫の父親は小さな田畑を所有し、農業もしていたが、1980年に田畑は売ってしまった。夫の末の弟ははじめ大阪で働いていたが、夫の父親が高梁市に帰らせ、Iさんの家の隣に住ませた。夫の父親は足が悪く、Iさんが世話をした。その人はとても気むずかしく、世話がたいへんだった。1988年に死んだが、最後のころはIさんが排泄物の世話までした。Iさんは、そのことを「嫁だから仕方がない」と言っていた。夫は1994年にガンで死んだが、このときは看病や入院費のくめんで苦労した。夫が死んでからは、漁はしていない。Iさんは同居していた夫の弟

たちにもつらく当たられた。当時を振り返って、Iさんは次のように言っていた。「しゅうと、こじゅうと、だんなに気をつけて生きてきた。昔は、頭を押さえられるように暮らした。」

Iさんの長女は大学に進学したかったけれど、妹や弟がいるのがまんしてもらった。娘と息子は高校を卒業した後、結婚や就職のために次々と家を出ていった。長女はずっと独身でIさんと同居していたが、1997年に結婚をして、家を出た。それ以来、Iさんは一人暮らしである。

③ 現在の暮らし

1990年に自転車に乗っていたとき、踏切で転倒した。それからは、自転車に乗るのがこわくて、乗らない。緑内障にかかったが、今年の5月に手術を受けて正常に見えるようになった。足が最近弱くなってきて、1カ月ほど前に道路で倒れてしまった。だから、あまり外出はしない。日常の歩行にはほとんど支障がないように見えた。体はほとんど健康である。緑内障の手術を受けてからは、生活で不自由はしていない。

現在は働いていない。自宅で掃除、洗濯、食事の準備、草取りをするくらいの毎日だ。緑内障の手術をしたけれど、少しまぶしいので、テレビを見ることもあまりない。買い物に自分で行くこともあるが、隣に住んでいる夫の弟の妻が買い物をしてくれることもある。一人暮らしなので、総菜を買ってきて食べることが多い。あまり外出することもなく、家の中でひっそりと暮らしているようであった。車の運転はできない。習い事はしていない。貧しいけれど、とりたてて生活で困っていることはない。

近所づきあいほとんどしていない。近所の人に道で会ったらあいさつをするくらいである。また、話したことがうわさになって広がってしまうのがいやなので、友人を作らない。だから、高梁市内でつき合いのあるのは、隣に住んでいる夫の弟夫婦だけである。

④ パーソナル・ネットワーク

Iさんのパーソナル・ネットワークは、図2のようである。長男夫婦は神戸市に住んでいる。正月やお盆に高梁市に帰ってくる。週末には電話をしてきて、孫の声を聞かせてくれる。Iさんが今年の5月に緑内障の手術をしたときは、長男が車で迎えに来てくれて、神戸市の病院に入院させてくれた。入院中は、長男の妻が洗濯などいろいろと世話をやいてくれた。退院してからは、長男夫婦の家に行った。長男夫婦には娘が5人もおり、一番年下の娘は幼稚園に行っている。長男の妻はその娘の幼稚園への送迎で忙しい。長男夫婦はもっと家にいるように言って

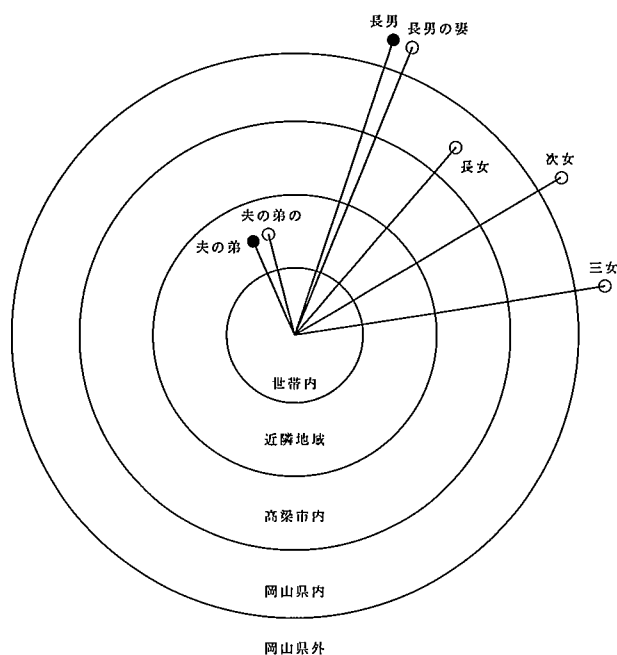


図2 Iさんのパーソナル・ネットワーク
注：黒丸は男性を示し，白丸は女性を示す。

くれたけれど，口実をつけて高梁市に帰ってきた。長男の妻は1カ月に1度病院に行って目の薬をもらってきて，Iさんに送ってくれる。

長女夫婦は倉敷市に，次女夫婦は千葉県に，三女夫婦は滋賀県に住んでいる。それぞれの娘とは，週に1度ほど電話で話をする。長女は正月やお盆に高梁市に帰ってくる。長女の夫は仕事で高梁市方面に来るとき，Iさんの家に立ち寄る。三女は正月やお盆に高梁市に帰ってくる。しかし，次女は遠方に住んでいるので，高梁市には帰ってこない。

夫の弟夫婦が隣に住んでいる。夫の弟の妻は買い物ときどきしてくれる。また，Iさんは彼女と世間話をすることもある。夫の弟夫婦は食事に来るときときどき言ってくれる。

⑤ 主観的幸福感

結婚後，Iさんは夫の家族と同居し，気をつけて生きてきた。そのため，気が小さくなってしまった。今は何もないけれど，気がねなく生きている。だから，1998年1月に生活満足度が100点だと答えた。しかし，モラル得点は5点と低かった。現在の生活満足度は1998年のときと同じ理由で100点である。

⑥ 将来について

息子は神戸市に行って同居するように勧めてくれる。しかし，Iさんはできるだけ1人で暮らしてゆきたいと思っている。結婚してから，気がねをせずと暮らしてきた。息子夫婦と同居したら，やは

り気がねをする。それがいやなので，一人暮らしをしたい。ただ，Iさんは息子夫婦には5人の子供がいて，養育にたいへんだと言っていたから，同居することで息子夫婦に迷惑をかけたくないとも思っているようであった。1人でどうしても暮らせなくなったら，神戸の長男のところに行くつもりである。

〔事例3〕

夫婦のみで暮らす高齢女性の事例

① 居住地の状況

Jさんは73歳の女性で，旧高梁町で夫と二人暮らしをしている。夫は78歳である。家は，備中高梁駅から歩いて15分くらいのところにある。このあたりは，住宅地である。少し行ったところには，いくつもの病院がある。

Jさんの町内会は9世帯からなっている。高齢者夫婦の世帯が町内には多い。葬式は役割を決めて，町内会でやっている。町内会でお祭りもやっている。町内会の人たちは親睦の日帰り旅行を毎年の秋に行っている。町内会は納税組合とはなっておらず，水道料金を徴収するだけである。

② これまでの暮らし

Jさんは岡山県新見市（高梁市の北隣の市）に生まれた。1948年に見合い結婚をし，高梁市に住み始めた。夫は長男でなかったため，夫婦二人暮らしであった。2人の息子と1人の娘をもうけた。

Jさんははじめ保育園の調理師をしていた。ところが，保母が必要ということで，保母の資格を取得し，保母として保育園に勤めた。夫は保母の資格を取得する勉強をするとき励ましてくれたし，Jさんが保母として働くのにも理解を示してくれた。次男がまだ小さいとき，夫は鳥取県米子市に転勤となり，5年間そこで働いた。Jさんは3時間ほどかけて米子まで行って夫の身のまわりの世話をした。夫が米子市で勤務していた間，Jさんの実母がJさんの家に同居して，子育てを手伝ってくれた。そのかいもあって，Jさんはずっと保母として働くことができた。

子供たちは大学進学のために高梁市を次々に出ていった。長男の妻が1987年に病気になって入院をしたとき，Jさん夫婦は自宅に長男夫婦の5歳の子供を引き取って1年間育てた。1987年に60歳で定年退職した後も，頼まれて児童館で保母として更に5年間働いた。つごう30年間保母として働いた。夫は60歳で会社を定年退職した後，関連会社に再就職して5年間勤め，1987年に65歳で仕事をやめた。共働き的时候は，Jさんが家事をしていた。夫が65歳で仕事をやめたときは，Jさんはまだ勤めていた。そのため，夫は家事を分担してやってくれるようになった。

た。次男が1990年に高梁市を出てからは、夫婦二人で暮らしている。

③ 現在の暮らし

Jさん夫婦はともに退職し、現在は働いてはいない。Jさんは少し血圧が高いが、健康である。社会的である。夫はまったく健康である。Jさんは車の運転をしないけれど、夫は今でも車の運転をする。だから、高梁市内の高原部に住んでいるJさんの妹のところなどに自由に行くことができる。

Jさんはほとんど毎日、編み物や彫刻を習ったり、短歌、せん茶、書道をしたり、グランドゴルフをしている。いろいろな習い事をするのが、生活の中心である。かつては婦人会の役員をしていたこともあるが、習い事に忙しくてやめた。ここ10年ほど近くに畑を借りて、野菜を作っている。野菜作りをしていると、畑の近くに住む農家の人たちと世間話ができるし、野菜の育て方を教えてもらえる。Jさんは、「野菜がだんだん大きくなってゆくを見ると楽しい」と言っていた。夫は重いものを畑に運ぶのを手伝ってくれる。収穫した野菜は自分たちが食べるだけでなく、山口県に住む次男夫婦にも送ってあげている。

夫は在職中から習字を習っていた。退職後は、子供たちに習字を教えており、その準備に毎日が忙しい。子供に習字を教えるのを生きがいとしている。また、毎日のようにテニスをしている。このように何かしているので、夫は家でテレビを見て寝ころがっていることはない。料理はできないけれど、掃除や洗濯といった家事はやってくれる。夫はJさんにやかましく言ったことはない。夫とはお互いにいたわりあって生活をしている。子供と同居していないので、夫と悠々自適な暮らしをしている。

④ パーソナル・ネットワーク

Jさんのパーソナル・ネットワークは、図3のようである。前述のように、同居する夫とは助け合って暮らしている。長女夫婦は京都に住んでいる。長男夫婦は岡山市に家を持っているが、長男は大阪府に単身赴任をしている。次男夫婦は山口県にいる。子供たちは、正月、お盆、5月の連休などに年3回ほどJさんの家に来る。それぞれの子供たちとは週に1回ほど電話で話をする。次男が戻ってきたときは、Jさんを車でドライブに連れていってくれる。次男は長男や長女より10歳以上も年下なので、次男がJさんにはとくにかわいいようである。Jさんが入院したら、次男の妻が世話をしてくれる。Jさんは「ときどきはばあさん顔をして子供たちとつき合っており、子供たちとは「いい関係」である。

実家の新見市には弟夫婦が住んでいる。Jさんは

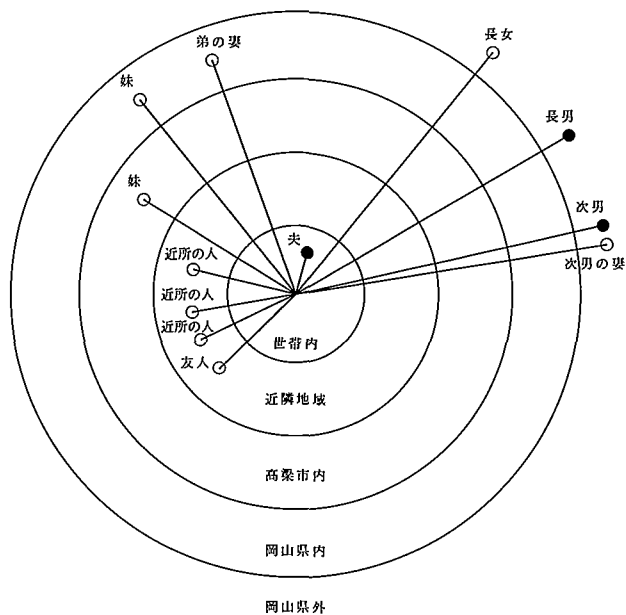


図3 Jさんのパーソナル・ネットワーク

注：黒丸は男性を示し、白丸は女性を示す。

正月、お盆、餅をつく日に実家に帰る。弟の妻は米や餅を送ってくれる。妹も新見市に住んでいる。Jさんが入院したら、その妹が世話をしてくれるだろう。もう1人の妹は高梁市の高原部に住んでいる。彼女とは月に1度くらい会っている。

1人の近所の女性とは親しく、家にあがり込んで話をする。しかし、Jさんは話したことがうわさになったり、うわさ話を聞くのがいやなので、その他の近所の人々とは家にあがり込んでつまんだ話はしない。玄関で話をしたり、道で会ったときあいさつをするくらいだ。留守の間の家の世話やちょっとしたことを頼める近所の人が2人いる。

保母をしていたときの友人が近所に住んでおり、家を訪ねて話をする。落ち込んだときにその友人に慰めてもらったりできるほど、その友人とは親しい。

Jさんは町内会だけでなく、防犯協会・消防団、婦人会、老人クラブ、コミュニティ協議会、趣味の会といった集団にも加入している。

⑤ 主観的幸福感

前述のように、Jさんはさまざまな習い事に生活の中心を置いている。毎日の生活で困ってはいないし、生活で不満もない。悠々自適な生活ができるのは、健康で元気だからだと、Jさんは言っていた。1998年の1月に生活満足度は70点と答えたが、これは謙遜をしたからだ。本当はもっと生活満足度は高い。モラル得点は13点であった。

⑥ 将来について

京都に住む長女は一緒に住もうと言ってくれる。

しかし、まわりに気づかってくれる知り合いが多くすんでいるから、Jさんは旧高梁町にずっと住みたいと思っている。Jさんによれば、「ここが天国」である。夫とは気心が知れているから、二人で暮らしているのが幸せである。ここなら他人に気がねをしなくていい。子供たちとどんなに親しくても、同居してはだめで、帰れる場所があることが大切だと、Jさんはいう。そうした場所があるからこそ、のんびりとした生活がおくれるのだそうだ。将来のことは未定であるが、子供に世話をしてもらおうとは思ってはいない。

〔事例4〕

夫婦のみで暮らす高齢女性の事例

① 居住地の状況

Kさんは78歳の女性で、旧高梁町で夫と2人で暮らしている。夫は73歳である。家は備中高梁駅から歩いて15分くらいのところにある。住宅地であるが、周囲には寺院が多い。

Kさんの町内会は9世帯からなっている。世帯主が60歳以上であるのは7世帯、40歳代が2世帯であるというように、ここには高齢者のいる世帯が多い。以前は隣の町内会と一緒に葬式の手伝いをしていたが、1993年よりこの町内会だけでやるようになった。ただし、それからは町内で葬式をあげたことはない。

② これまでの暮らし

Kさんは、高梁市の東隣にある賀陽町で生まれた。1943年に見合い結婚して、旧高梁町に住み始めた。両親が決めて、結婚をした。夫の父親は既に亡くなっていたので、旧高梁町で夫の母親と同居した。彼女は中風で体が不自由であったため、Kさんが看病をした。夫は第2次世界大戦で戦死した。夫の弟と1947年に再婚した。前の夫と再婚した夫との間に、それぞれ1人ずつ息子がいる。

再婚した夫は、トラックの運転手をしていた。Kさんは小学校卒業後に補習学校に行き、和裁を習った。その後、和裁を独習した。結婚後は、自宅で和服の仕立ての仕事をし、ごく最近まで働いていた。家事、育児、夫の母親の看病をしながら和服の仕立てをしていたので、とても忙しく苦勞した。1953年に夫の母親は死んだ。長男は1962年に高校を卒業し、就職のために高梁市を出ていった。次男は1965年に高校を卒業し、就職で高梁市を離れた。次男が家を出てからは、夫婦2人で暮らしている。

1963年に現在の場所に移転した。そこには、水道がついており、電気洗濯機で洗濯ができるようになった。それまでは、井戸水で洗濯をし、高梁川の川原ですすぎをしていたので、たいへんであった。電気

洗濯機を買って家事が楽になったとき、Kさんは一番うれしかった。夫は1968年に転職し、病院の運転手になった。そして、1988年に退職した。

③ 現在の暮らし

2000年の8月に軽い脳梗塞になり、現在は2週間に1度病院に通院している。20日前まで記憶ができなかったが、今はよくなった。Kさんと話をしている、そうした病気をしたとはまったく思えなかった。日常的な運動には不自由はしていない。

和裁の仕事を長い間してきたが、脳梗塞になってからはいい仕事ができなくなってしまった。そこで、孫の和服を仕立てて、和裁の仕事はやめた。ただし、自分の服の修理のような簡単な針仕事は現在でもしている。もったいないから新しい服を買わず、古いものを直して着ている。

Kさん夫婦はともに仕事はしていない。自宅近くに畑を借りて、野菜作りをしている。夫婦とも1日に3時間ほど畑仕事をしている。野菜は自分たちで食べたり、近所の人たちに分けてあげている。自宅では、テレビを見たり、針仕事をしている。夕方、40分ほど友人と一緒に散歩をする。夫は車の運転を今はしないので、遠方へは行けない。前の家に住む高齢男性が郊外型の大型店（スーパーマーケット）に車で買い物に行くときに、一緒に連れていってくれる。そのときに1週間分の食材を買いだめする。近くの商店へは、荷物を入れられる小さな車を押し歩いて行く。

1980年から詩吟を月に3回ずっと習っていた。大会に出場し、優勝したこともある。詩吟が好きである。老人クラブに入会しており、その活動として俳句、民謡、踊りもしている。詩吟や俳句の活動を通して、同年代の友人ができた。バス旅行にもしばしばそうした友人たちと参加した。

脳梗塞になってからは気力がなくなって、何をやるのもたいぎになった。詩吟の教室は自宅から少し離れた所にあるから、脳梗塞をしてからは通ってはいない。詩吟の仲間は、「春になったらおいでよ」と言ってくれる。俳句の会は自宅近くで開かれるので、今でも出席している。友人たちとカラオケに月に1回くらい行く。脳梗塞をしてからはバス旅行に行くのが面倒となり、参加しなくなった。気力がついてゆかないから、Kさんはあと10歳若かったらと思っている。

④ パーソナル・ネットワーク

Kさんのパーソナル・ネットワークは図4のようである。夫と同居している。Kさんが入院をしたら、夫に世話をしてもらえる。また、夫に落ち込んだときに慰めてもらったり、いろいろな相談をする。長

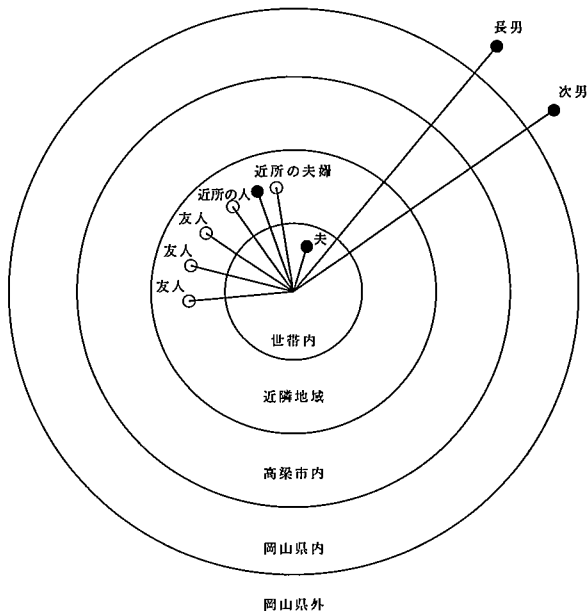


図4 Kさんのパーソナル・ネットワーク
注：黒丸は男性を示し、白丸は女性を示す。

男は大阪府に、次男は奈良県にいる。長男と次男は正月やお盆に高梁市に帰って来る。電話は週に1回はある。Kさん夫婦は年に2回ほど長男と次男に会いに、関西に行く。最近では、長男か次男が車で高梁市にKさん夫婦を迎えに来てくる。Kさん夫婦が長男と次男それぞれの家で数日をすごした後、長男か次男が車で高梁市まで送ってくれる。Kさんは子供たちに自分たちのためにお金を使わせたり、迷惑をかけたくないと思っている。

家の前に住む高齢男性は、車で買い物に連れていってくれる。その妻とは一緒に詩吟をしており、友人である。近所に住む同年代の女性と親しく、おすそ分けをしたり、いろいろな相談をしたり、留守の間の家の世話をしてもらったり、ちょっとしたことを頼める。Kさんは近所の人たちに親切にしてもらい、幸せだと言っていた。

詩吟や俳句の活動を通して知り合った友人が近隣地域に3人いる。そうした友人とは一緒に旅行に行ったりしていた。

⑤ 主観的幸福感

Kさんはもっと子供に会いたいと思っているが、そうしたことを子供に言って迷惑をかけたくはない。ところで、Kさんは「昔の人間だから」、家事をすべてしている。夫は買い物はもちろん、お茶をわかすことさえもしない。だから、腹が立つこともある。ただ、Kさんがどこに行っても夫は文句を言わないので、Kさんは自由に外出ができる。1998年の1月に調査をおこなったときは、生活満足度は70点と答

えた。モラル得点は12点であった。現在ではもっと気が楽になったから、生活満足度は80点である。

⑥ 将来について

大阪府にいる長男は、長男夫婦の家で同居することを勧めてくれる。しかし、高梁市にいればどこに行っても知り合いがいっぱいいて、よくしてくれるから、ずっとそこで暮らしたいと思っている。病気になったときに高梁市の病院に入院するか、長男が大阪府の自宅に連れていって介護することになるか、Kさんや夫が病気になって動けなくなってからでないと分からない。Kさんは子供に迷惑をかけないで、ころっと死ぬことをお不動さんをお願いしている。

[事例5]

子供夫婦と同居する高齢女性の事例

① 居住地の状況

Lさんは73歳の女性で、旧高梁町で娘夫婦と3人で住んでいる。家は、備中高梁駅から歩いて15分くらいのところにある。商店と住宅がまざった地域である。少し行ったところには、いくつもの病院がある。

Lさんの町内会は33世帯からなっている。葬式があるとき、この町内では葬儀屋に葬式を頼むのではなく、町内会が葬式をおこなうことになっている。町内会の人々が手分けをして、祭壇を市役所から借りたり、霊柩車やタクシーの手配といった仕事をおこなう。また、婦人会の人たちが死に装束を縫う。今日ではホテルで結婚式の挙式をし、町内会が挙式を手伝うということはない。けれども、日ごろから世話になっている町内の世帯にはお金を包んで持ってゆく。町内会は納税組合ともなっている。町内会が所得税や固定資産税といった税金、国民健康保険料や国民年金保険料、水道料金を徴収し、税務署や市役所に納入している。町内会が税金、保険料、水道料金を徴収すると手数料がもらえ、それを活動に使っている。婦人会は新聞、段ボール、ビン、缶の回収をし、それを売って活動資金を得ている。

② これまでの暮らし

Lさんの出生地は、岡山県の東部にある町である。村長をしたことがある裕福な家に生まれた。子供のときは、キリスト教の学校に行っていた。1948年に高梁市の商家に嫁いできた。両親が同じくらの家柄ということで結婚を決めた。嫁いだ商家は1955年に他の同業の商家と合併して会社組織となった。そして、夫は市内にある別の商家に通って、そこで働くようになった。夫の姉がキリスト教徒であった。その影響で、Lさんは1950年ころからときどき教会の礼拝に行っていた。1970年に教会に保育園が設け

られたとき、頼まれて5年間保母として働いた。そのときに洗礼を受けて、キリスト教徒となった。保母をしていた期間を除いて、Lさんはずっと専業主婦であった。そして、家事以外のことはすべて夫まかせて生きてきた。Lさんはサークルなどに入って、切り絵、短歌、書道を習っていた。

夫が生きていたときは、夫に尽くしてきた。例えば、夫は昼食をとり自宅に戻ってくるので、Lさんは昼食の準備と夫と一緒に食事をするために、一日中家をあけるといってはなかった。一日中家をあけたら夫に悪いと感じていた。だから、夫が生きていたときには、一日中外出したり、泊まりがけの旅行に行くことさえもしたことがなかった。教会の会合にも自由に出てゆけなかった。また、Lさんは夫の決めたことに従って生きてきた。Lさんが言ったことが家庭内で通ったことは2度しかなかった。夫とこのように生きてきたから、Lさんは「主人が生きていたときは、くくられたような生活だった」と言っていた。

Lさん夫婦には、2人の娘がいた。息子はいないので、Lさんの「家」の世話をするというので、長女を結婚をさせた。夫の仕事の関係で、長女夫婦は千葉県にずっと住んでいた。次女は結婚して、岡山市で暮らしている。長女は次女よりも遠方に住んでいたけれども、長女は次女よりもLさんの家にしばしば来ていた。

夫が1994年に亡くなって、生活は一変した。それまでは、夫に頼った暮らしをしてきたので、夫が死んでからは、Lさんは気落ちして、習い事をあまりしなくなった。また、さみしさから、外をよく歩くようになった。長女は月に1度ほど千葉県から来て、相談相手になってくれたり、庭の草むしりや冷蔵庫の掃除などをしてくれた。だから、Lさんは心強く感じた。

1998年に長女の夫は岡山市に転勤となった。長女夫婦はLさんの家を改築し、Lさんと同居するようになった。長女の夫は岡山市の職場に通勤し、長女は総社市（高梁市の南隣の市）にパートで働きに行っている。長女夫婦の子供たちは既に成人しており、長女夫婦が高梁市に転居してからも千葉県にずっと住み続けている。

同居した当初は、Lさんは長女夫婦のためと思って娘夫婦の洗濯や部屋の掃除をしようとしたら、わずらわしがられた。それからは、長女夫婦とはお互いに干渉しあわないで暮らしている。そうして暮らすことで、娘夫婦とうまくやってゆけることが分かった。同居してからは、長女夫婦とあまり話をしなくなった。同居する前は長女が月に1度ほど千葉県か

ら戻って来てくれたが、そのときのほうが娘とよく話をした。娘夫婦とのこうした生活が始まったので、同居し始めたときは以前よりもさみしかった。

③ 現在の暮らし

自宅は商店街の中にあるし、歩いて数分のところらにいくつもの病院がある。家がこのように便利な場所にあるし、健康なので、日常生活は自力でおくれる。取り立てて生活で困ったことはない。

Lさんは仕事をしていない。食事の準備は、長女がしている。長女夫婦とは食事を一緒にするが、それ以外は自分の部屋ですごしている。だから、娘夫婦との一家団らんというものはない。今では自分を捨てて、娘の考えに合わせて生きている。

娘夫婦は働いているので、Lさんは昼間は一人で自宅ですごすことが多い。家では、書道や編み物をしたり、庭の草むしりをしている。足がこのごろ弱くなったので、散歩はほとんどしなくなった。車は運転できない。教会の礼拝に日曜日に行っている。夫が亡くなってから、時間に束縛されることがなくなった。また、外出や旅行に誘ってくれる友人が新たにできた。だから、このごろはその友人と一緒に買い物などに岡山市や倉敷市に出かけたり、泊まりがけで旅行に行ったりしている。そうしたことをしてストレス解消をしている。

④ パーソナル・ネットワーク

Lさんのパーソナル・ネットワークは、図5のようである。入院したら、同居する長女夫婦に身のまわりの世話を頼める。次女夫婦は岡山市に住んでいる。次女は正月やお盆に帰ってくるし、月に1回ほど電話で話をする。

^{かぶうち}株内と呼ばれる、同じ姓で相互に助け合う家が隣地域に数軒ある。親戚の家といってよいであろう。留守のときの家の世話といったことは、株内にあたる家の男性に頼む。また、同年代の株内の女性と親しく、世間話をする。

2人の親しい友人が教会のメンバーの中にいる。1人は高梁市内におり、もう1人は総社市にいる。日曜日の礼拝に会うだけでなく、月に1回ほど会って話をする。教会のメンバー以外の人たちと話をすると、言ってもいないことを広められてしまう。教会のメンバーの人たちは信頼でき、そうしたことはしないから、教会のメンバーには個人的なことを話せる。最近、教会のメンバーではない人と友だちとなった。その女性は旧高梁町に住んでおり、外出や旅行と一緒に出かける。

⑤ 主観的幸福感

夫が亡くなってさびしさを覚えた。しかし、長女がしばしば来て相談相手になってくれたから、心強

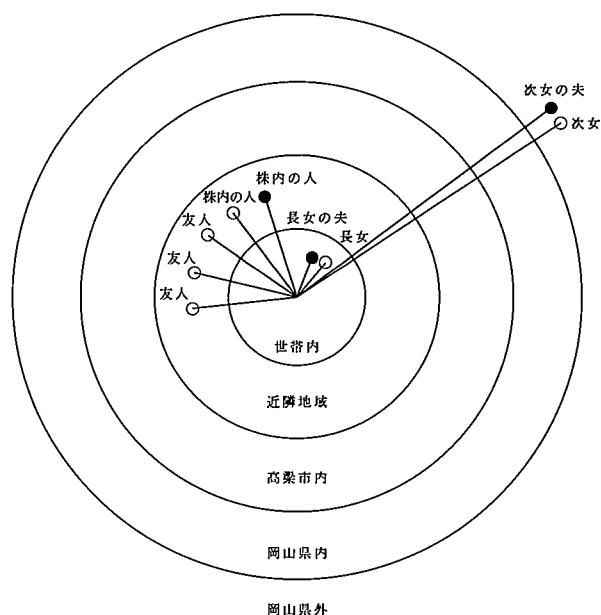


図5 Lさんのパーソナル・ネットワーク
注：黒丸は男性を示し、白丸は女性を示す。

かった。また、夫が死んでから、時間を自分の好きなように使えるようになった。こうしたことから、Lさんは1998年の1月には生活満足度は80点と答えていた。しかし、モラル得点は6点と低かった。

調査票による面接調査の後に、長女夫婦と同居するようになった。長女とあまり話をしなくなったので、さびしそうであった。もっと友人を作って親しいつき合いをしたがっていたけれども、話したことがうわさになって広がることをおそれて、人間関係を広げることができない。人間関係の点で、不満であるようであった。毎日の生活では、信仰が心の支えとなっている。Lさんは「教会にゆくことで、心の持ち方が変わってくる」と言っていた。今でも生活満足度は80点であると答えていた。

⑥ 将来について

このまま長女夫婦と同居して、旧高梁町で暮らす。

〔事例6〕

子供夫婦と同居する高齢女性の事例

① 居住地の状況

Mさんは旧高梁町に住む、75歳の女性である。夫は既になく、長男夫婦および孫3人と同居している。Mさんは現在では働いていない。家は備中高梁駅から歩いて5分くらいのところにある。住宅地であるが、5分も歩けば商店街がある。

Mさんの町内会は約40世帯からなっており、4班に分かれている。町内の人々が冠婚葬祭のときに助け合うことはない。また、町内の清掃などの仕事は

シルバー人材センターに頼んでもらうので、住民が協力し合って町内の仕事をするということもない。Mさんは町内会のことは同居する長男夫婦に任せており、まったくかかわっていない。

② これまでの暮らし

Mさんは高梁市の東隣にある賀陽町で生まれた。弟が2人いた。父親は小学校の先生であった。母親はMさんが10歳のときに死んだ。それ以来、Mさんが家事や弟たちの世話をした。1947年に見合いで結婚し、高梁市の旧高梁町の地区に住むようになった。

夫には5人の弟と妹がいた。夫は長男であったので、夫の両親と5人の夫の弟や妹と同居した。夫の家族は自営業をしていたが、1962年から工事店を始めた。Mさん夫婦は、2人の息子と1人の娘をもうけた。夫の母親はMさんに家事のやり方を教えてくれたが、自らは家事をしなかった。だから、家事はMさんの肩にかかっていた。そのうえ、Mさんは家業の事務や育児をしていた。だから、Mさんは当時とても忙しく、自分の時間を持てなかった。1970年に夫の父親が、1975年には夫の母親が死亡した。夫の父親が死んでからは多少時間ができたので、編み物を習い始めた。

長女は大学を卒業して結婚し、今は千葉県に住んでいる。長男は大学に進学するために高梁市を出たが、卒業後は旧高梁町に戻って家業の工事店に勤めた。次男も大学進学で高梁市を出た。卒業後、東京で2年間働き、そのあと旧高梁町に戻って家業の工事店に勤めた。長男は結婚して、両親の家に同居した。次男は結婚して、近所に家を建て住んでいる。長女の子供が小さいときは、孫のお守りに長女の家にしばしば行った。夫は1989年に亡くなった。それからは、長男と次男が4人ほど雇用して工事店の仕事をおこない、Mさんが事務をした。長男夫婦の自宅が工事店となっている。長男夫婦も次男夫婦もMさんに同居するようにいってくれたが、長男の顔を立てるために長男夫婦と同居することにした。夫が生きていたころから友人と泊まりがけの旅行をするようになり、海外旅行にも行った。これまで旅行はだいたした。

家の立ち退きを求められ、長男夫婦とMさんは1998年に旧高梁町内に新たに家を建て移った。現在の家は、以前に住んでいた家から500メートルほど離れたところにある。新居は駅、市役所、商店、病院などに近い便利な場所にある。Mさんは1998年に仕事をやめた。それからは自由な時間がもっとできたので、パッチワークを習い始めた。

③ 現在の暮らし

Mさんは長男夫婦および孫3人と同居している。

慢性肝炎をわずらっているけれど、日常生活でまったく支障はない。長男夫婦は自宅で工事店を営んでいる。家事はたいてい長男の妻がしている。食事を一緒にしたり、孫たちと話をしてしたりして、長男の家族との一家団らんを楽しんでいる。長男の妻にはあまり求めないようにしている。Mさんは年金で暮らしており、経済的には自立している。生活で不自由はまったくしていない。

Mさんは社会的であり、悠々自適な生活をおくっている。朝は30分ほど犬の散歩をし、夕方は友人と一緒に1時間ほど家の周りを散歩する。散歩の途中で次男に家に行って話をしたり、そこで夕食を取ることもある。昼間は家の掃除をしたり、自分の部屋でパッチワークをしたり、友人の家に行って話をしたりしてすごしている。月に2回パッチワークを習いに行っている。その帰りには、パッチワーク仲間と昼食を取って、おしゃべりをする。慢性肝炎の治療に週に2回病院に通院している。病院は以前住んでいた家の近くにあるので、通院のときにその近くにいる友人の家に立ち寄ったり、病院に行く途中で知り合いの人に会って立ち話をする。毎日の生活は、このようにほとんど近所でおくっている。体が弱くなったので、以前のように泊まりがけで旅行に行かなくなったけれど、日帰り旅行は友人と一緒に今でもときどきしている。

④ パーソナル・ネットワーク

Mさんのパーソナル・ネットワークは、図6のようである。長男夫婦と同居している。いろいろな相談は長男の妻にしている。現在は元気なので、自分のことは自分ででき、長男夫婦にはあまり頼ってはいない。けれど、体が不自由になったら、長男夫婦が看病や病院への送迎はしてくれるだろうと、Mさんは考えている。「健康なときは一人や夫婦二人で住んでいてもいいが、病気になったときは子供と同居するともすごく心強い」と言っていた。次男は近所に住んでいて、Mさんは散歩の途中にしばしば立ち寄ったり、一緒に食事をする。次男はMさんの家に毎日通ってきて、働いているので、顔を毎日合わせる。留守のときの家の世話は次男に頼める。千葉県に住んでいる長女は1年に1度ほど高梁市に帰ってくる。Mさんは今年の5月に長女の家で1か月ほど泊まってきた。しかし、そこには友人がいないから、長期間そこにはいらなかった。食べ物などを長女に宅配便で送ったり、逆に送ってもらったりしている。

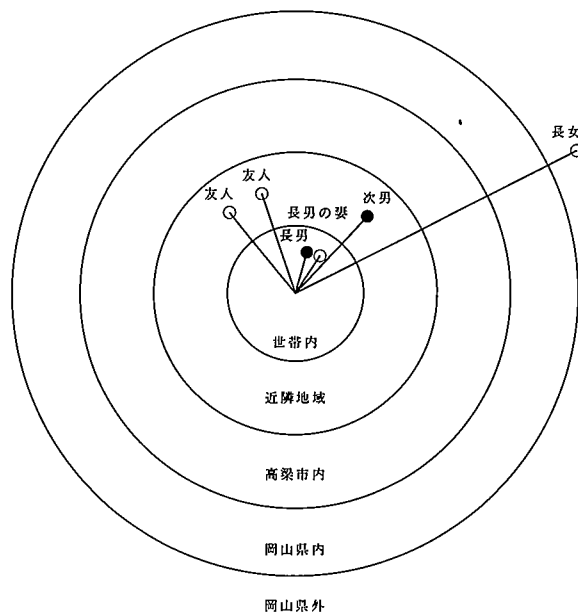


図6 Mさんのパーソナル・ネットワーク
注：黒丸は男性を示し、白丸は女性を示す。

親しい友人は2人いる。2人とも少し年下の女性で、一緒にパッチワークを習っている。1人は子供が小さいときからの友人である。もう1人の友人とは一緒に毎晩散歩をしている。その人は、Mさんの体をいろいろと気づかってくれる。話をしたことを他人に広める人がいるが、2人はそういう人ではなく、信頼できる。

⑤ 主観的幸福感

1998年の1月に調査をおこなったときは、仕事をやめた直後であった。編み物を習ったりしていたけれど、仕事に少しは気を配っていた。だから、生活満足度は95点であった。モラール得点は14点であった。現在ではまったく仕事に気をつかわず、自分のためだけにのんびりと生きている。パッチワークをすることが今の生きがいである。日帰り旅行にもよく行く。あえて望むことをあげれば、病気がこれ以上悪くならなければいいと思っているくらいだ。悠々自適な生活をおくっているから、現在の生活満足度はもっと高い。

⑥ 将来について

高梁市には50年ほど暮らしているから、親しい友人がいる。また、自然が美しい。とくに十五夜ときの月がきれい。だから、長男夫婦と同居して高梁市にずっと住み続けたい。